

# ベトナムの竈と土製支脚

## ——その形態と機能——

鍋田尚子

### 1. はじめに

本稿は「ベトナムの竈」とそこで用いられてきた土製支脚を中心に、その形態と機能を現地での観察と出土資料や文献から多角的にとらえていこうとするものである。「ベトナムの竈」とは、ここではベトナムの台所における火所を総称した用語として使用する。

筆者はベトナムのキン族（京族 Kinh 族／越族）が信仰する「竈神」<sup>かまどがみ</sup>を研究してきた。なかでも物質文化の視点から、フエ地域で「竈神」として祭祀されてきた神像と版画について、その生産者と生産工程、信仰とモノの関わりなどを歴史背景や地域性をふまえて調査を続けている〔鍋田 2014、2016a、2016b〕。今回は「竈神」が祀られる「竈」そのもの、すなわち、実際の煮炊きに用いる施設と道具について考察する。しかし、筆者は民具資料としての「ベトナムの竈」の調査や分析はまだ十分にできてはいない。そのため、ここでは考古資料などからそれらの形態を歴史的に整理しつつ、筆者がこれまでみてきたベトナムの人々が暮らしのなかで用いてきたそれらの道具について述べていこうと思う。

まず、本稿がテーマにかかげた「ベトナムの竈」という用語について、あらかじめ確認しておきたい。日本で「竈」という語が示すのは、たとえば『日本民具辞典』<sup>(1)</sup>によると、「鍋・釜をのせて煮炊きに使用する火所の総称。（中略）一般には土間に築くもので、泥土や煉瓦などで周囲を囲って一方に焚き口をつけ、上部に鍋・釜のかかる竈口を開けている」とある。東アジアの状況は『東アジア考古学辞典』<sup>(2)</sup>に「火の周囲を覆う形式の炊飯施設。前面に焚口、上面に甕や釜を掛ける掛け口を持つ。火の周囲が解放された形式は炉とされる。（中略）住居に造り付けられる造り付け竈と、土器として形作られる移動式竈（竈形土器）がある。（中略）底部を有するものは焜炉として区別される」とある。

筆者が主に調査対象としてきたベトナム・キン族は、歴史時代以前から現在にいたるまで「泥土や煉瓦などで周囲を囲って一方に焚き口をつける竈」は民間の調理場には普及せず、多くは「火の周囲が解放された形式の炉」で煉瓦や五徳などを用い、また焜炉を使用してきた。これまで筆者は、研究対象としてきたベトナムの「竈神」を祀る道具や施設に「竈」という日本語を当ててきた。しかしベトナムの台所の神を「竈神」とし、その神霊の祀られる対象である「竈」の

あり方は、日本語でいう一般的な「竈」の概念とはずれがあることに注意しなければならない。そのことを以下に説明しておく。

それはベトナム語における「竈神」と「竈」という漢越語が用いられてきた経緯と関わる。筆者はベトナムの「竈神」への関心から出発しているが、このベトナムの「竈神」には、二つの系統の呼称がある。ひとつは、ベトナム語の「ベップ (bếp)」を用いた、「ベップ神 (タンベップ thần bếp)」 「ベップ王 (ヴァベップ vua bếp)」であり、この「ベップ」に相当する漢字は与えられていない。もうひとつは漢越語で「タオ神 (Táo thần / thần Táo)」、 「オンタオ (Ông Táo)」などの呼称であり、この「タオ (táo)」には「竈」が当てられている。現在のベトナムの人々が呼んでいるのがこの「オンタオ」である。「オン」は「翁」であり、「オンタオ 竈翁」は親しみを込めた呼び方である。正式には「タオクアン (Táo quán)」といい、漢字の表記は「竈君」となる。これは中国の竈神の名称であり、ここからベトナムの台所の神の信仰に中国の竈神が影響していることがわかる。そしてこの言葉が文献資料にあらわれるのは 17 世紀である。

ベトナムの民間の人々は長く文字を用いず、正史などは漢文体で書かれてきた。そこには庶民の暮らしの記述はほとんどない。17 世紀、宣教師などにより人々の暮らしの様子が記されるようになり、同時期に現在のベトナム語のもととなるローマ字表記も作られた。そこに「ベップ」(ベトナム語)と「タオ」(漢越語)の文字がみられるのである。17 世紀の辞典<sup>(3)</sup>によれば「タオ」は、「土製の支脚 (đầu rau nhà bếp)」であり、この支脚がベップ王と同じ神であることが説明されている。ここでの「タオ」は日本語でいう一般的な「竈」ではなく、炉に置かれる三脚を指している。しかし「タオ」は道具を表すための言葉ではなく、この三脚自体が神であり「竈神」であることを意味している。

一方でベトナム語の「ベップ」は、火所をあらわす言葉として包括されている。『詳解ベトナム語辞典』<sup>(4)</sup>には、台所や厨房、調理の意味のほか「かまど」ともあり、封建王朝時代には、日本の竈と同じく戸数(や世帯)を数える語でもあったと記されている。実際にベトナムで使用される「泥土や煉瓦などで周囲を囲って一方に焚き口をつける竈」は、「ベップ」と呼ばれ、ベトナム語の文献や資料にも「Bếp」として記されている。また、ベトナム語には日本語の炉とはほぼ同じ意味をもつ「ロー (Lò)」という語がある。現在は容

器または装置としての炉や窯の意味で用いられることが多く、ベップと合わせた「ベップロー (bếp lò)」は焜炉の意味になり、また「泥土や煉瓦などで周囲を囲って一方に焚き口をつける竈」にも用いる。この「ベップ」と「ロー」はベトナム語の「火をたく (ニョム nhóm)」と合わせて用いるとき、「ニョムベップ」「ニョムロー」は共に「竈に火を入れる」と訳される。台所で用いられる道具にはそれぞれの名称があるものの、日本の竈と囲炉裏、炉のように火所の形態を区分する概念はベトナム語には明確にはないのである。

それでは、「ベトナムの竈」すなわち、包括的にとらえたベトナムの台所における火所の実態はどのようなものか。本稿では、現地でのフィールドワークと考古学の研究成果を活用して具体的にたどって検討していくことにする。

また、本稿は筆者がこれまで竈神の調査を行ってきたキン族の「竈」についての報告である。ベトナムにはキン族(約86%を占める)を含め54民族が公定されている。53の少数民族の多くは山地や盆地に居住しそれぞれに多様な生活形態や文化を持っている。キン族の竈との関わりから必要な場合は少数民族の竈も取り上げていきたい。

## 2. 「ベトナムの竈」の変遷

まずはベトナムで用いられてきた「竈」とそれが置かれた空間について、先行論文から時間軸に沿って整理する。

### 1) 「ベトナムの竈」

#### (1) 歴史時代以前

土製支脚が北部のドンソン期を除き北ベトナムの先ドンソン<sup>(5)</sup>～ドンソン文化の居住址に常出する [大林、今村、宇野 1984:141]。この土製支脚とは、考古学者小林行雄が命名した用語であり、「炉中に三つ並べ据えて、甕・釜の類を火に懸けるための支え脚」のことをいう [小林 1941:276]。

ハノイ歴史博物館には、フングエン文化とドンソン文化の土製支脚が展示されている(表1-①、②)。考古学研究から少しみていこう。西村昌也は、北部ニンビン省イェンモー県に位置するマンバック (Mán Bạc) 遺跡を調査し、そのL1-L3(第1層～第3層)から「上端の片側に突起を有す土製支脚」が確認され、その土製支脚はフングエン期<sup>(6)</sup>に特徴的な遺物であると記している [西村 2011:46-49]。それ以前には出土が確認されていないことから現時点では、ベトナム最古の土製支脚であるといえる。

ドンソン文化の居住址から出土した土製支脚について、梅原末治が日本の北九州出土の弥生式土器、土製支脚と非常に類似していることを指摘している [梅原 1944]。所謂「犬埴輪」といわれていた日本の土製支脚と類似するのだが、ベトナムでは犬ではなく豚とされ、土製支脚と判明されるまで用途不明で上下を逆さまにして扱われていたという<sup>(7)</sup>。

ハノイ歴史博物館に展示されたふたつの土製支脚は形態に違いがみられる。この土製支脚の上には一緒に出土した土器

が置かれている。西村は、土製支脚の上のせる煮炊きに使う土器の形態を、球形あるいは楕円形の器体断面で、口縁部ですぼまりを持つ釜形のもが主体であり、この釜形土器<sup>(8)</sup>と土製支脚は歴史時代を経て現在まで使われ続けており、後期新石器時代後半以降の北ベトナムでの伝統的調理方法であったと考えられると記している [西村 2011:64-65]。そしてこの釜形土器をもとに甌が発展し、土製支脚もまた発達したという [西村 2011:87]。展示されたふたつの土製支脚の形態の違いは上に置かれた道具と関わりがあると見える。

ここで、土製の支脚という点に少し注目したい。最古の土製支脚が出土する中国浙江省の河姆渡文化や新石器時代から青銅器時代まで土製支脚の出土が残る広東では、三石炉との併存がみられ、土製支脚の背後に三石炉を考える必要がある [大林、今村、宇野 1984:141-142]。「土」と「石」の違いであるが、キン族と同源といわれるムオン族<sup>(9)</sup>やベトナムの少数民族は三つ石を用いてきた。日本に目を向ければ沖縄も三つ石を使用してきた。しかしキン族が三つ石を併用したという報告は聞かれない。三石炉の使用を選択しなかった理由は現時点ではわからないが、キン族にとって「土」を原料とした土製支脚の使用は人々の暮らしと信仰に結びついていく。このことは第5章で少し述べたい。

#### (2) 17世紀-18世紀

歴史時代以前から大きく時間を隔てた17-18世紀にかけて、住居址から煮炊き道具に関する出土遺物の報告がある。

##### ①中部クアンナム (Quảng Nam) 省ホイアン (Hội An)

ベトナム中部ホイアンで1993年から継続して調査を実施している昭和女子大学の報告書に土製支脚や土製焜炉の出土が記されている。1997年の報告では、ファン・チュー・チン129から土製焜炉片が2点(一つは焜炉の脚部)出土している [菊池・菊川 1997:133-143]。2002年の報告書では、ファン・チュー・チン69/5地点から土製焜炉片等の7点、土製支脚1点、土製焜炉6点が報告されている [阿部 2002:65-72]。

##### ②北部ナムディン (Nam Định) 省バクコック (Bách Cốc) 村

ベトナム北部の紅河平原域の下流域にあるナムディン省ヴゥバン (Vũ Bản) 県にあるバクコック村で1993年から村落の総合調査が行われ、そのなかの考古学調査から17-18世紀の住居址と炉址、土製支脚の出土が報告されている。

そこにはバクコック村、XB (xóm B) 地点のL4-3層から土製支脚を使用した炉址(18世紀)が確認されたとあり [西村 2011:238]、またベトナム語での報告には、L4層の台所址にオンタオのような土製の角柱があり、17世紀に粘土で作られたオンタオが使用されていたとある<sup>(10)</sup> [Nishimura, Nishino, Trịnh, Hàn:131]。オンタオはベトナムの竈神であるが、土製支脚の呼称にも用いられる。

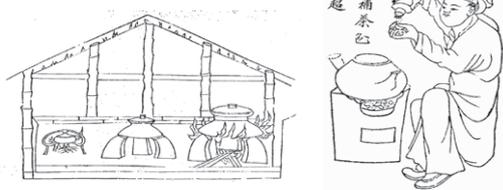
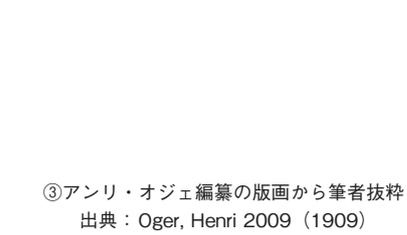
(3) 19世紀-20世紀初頭

19世紀に入ると写真と版画で「ベトナムの竈」の様子をみることができる。19世紀後半の土製焜炉の写真が残されている。フランス語で書かれた学術雑誌 *Bulletin des Amis du Vieux Hué* 『古都フエ友の会紀要』(以下 B.A.V.H と記す)に、1884-1886年フランス軍指導者の書簡集が掲載されている。この時期は清仏戦争から阮朝ハムギ (Ham Nghi=咸宜) 帝の抗仏戦とフエ陥落 (失守京都)、そして翌年 1887 年は仏領イ

ンドシナ連邦が成立しハノイに総督府が置かれている。その書簡集のなかに「トンキンの田舎に向かうサイゴンの歩兵部隊」とキャプションがつけられた写真がある [B.A.V.H 1930]。そこには鉄鍋が置かれた2つの土製焜炉とベトナム人が写っている。フランス軍が、土製焜炉を用いて調理をしながらベトナム人部隊を連れて中部から北部へと移動し戦闘を続けていたことがわかる。

また 1900 年はじめ、ベトナム北部地域の人々が煮炊きに

表1 「ベトナムの竈」の変遷 (表1-①、②、④~⑪/筆者撮影)

<p>歴史時代以前</p>	 <p>①フングエン文化の土製支脚      ②ドンソン文化の土製支脚</p>	<p>①②出典：ハノイ歴史博物館展示 (2013)</p>
<p>17-18世紀</p>		
<p>19世紀末~20世紀初め</p>	<p>一家で使用する竈-</p>  <p>起補茶</p>	 <p>此灶鉄製 民家使用</p>
<p>19世紀末~20世紀初め</p>	<p>一仕事で使用する竈-</p>  <p>洗濯屋の容器      蜜を煮て菓子を作る</p>	 <p>ブン (粳米粉の麺) 作り</p> <p>③アンリ・オジェ編纂の版画から筆者抜粋 出典：Oger, Henri 2009 (1909)</p>
<p>現在</p>	 <p>④土製支脚 (中部フエ地域フォックティック村) ⑤土製焜炉 (中部ファンザン省の民家) ⑥土製焜炉 (カーザン) (南部ホーチミン市郊外の民家) ⑦五徳 (北部タイビン省ヴートゥー県の民家) ⑧煉瓦を積み立てて作った竈 (南部ホーチミン市郊外の民家) ⑨作りつけ竈 (中部ホイアン旧市街 廣勝家) ⑩オイル焜炉 (中部ホイアン旧市街の民家) ⑪ガスコンロ (南部ホーチミン市の民家)</p>	

使用していた道具が版面に残されている。フランス人アンリ・オジェが編纂した版面である<sup>(11)</sup>。26点確認ができ、具体的には、土製支脚8点、レンガを積み立てた支脚1点、五徳2点（そのうち1点は土製支脚と併記）、土製焜炉7点、銅製焜炉1点、土製焜炉（南部）1点、周囲が覆われた作り付け竈7点である<sup>(12)</sup>。家庭で使用されているのは、土製支脚、五徳、土製焜炉、銅製焜炉である。職人が使用するのは簡易の小さな作り付け竈であり、その様子が説明されている。

それらの上には、素焼きの土鍋、フングエン文化・ドンソン文化で出土したものと同じ釜形土器、また鉄鍋などが置かれている。大型の急須のような注ぎ口と持ち手のついた蓋付きの土製品もみられる（表1-③）。

#### （4）20世紀以降から現在

近年の台所道具は博物館の展示でいくつか確認することができるが、資料として報告されたものはほとんどない。そのなか、B.A.V.Hに中部ビンディン省で生産された3種の素焼きの土製焜炉が紹介されている[Bulteau 1927: 149-184]。底部のある2つの焜炉は「火炉（hỏa lò）」、「炉（lò）」とあり、底部のない移動式竈には「竈、オンタオ（bếp, kiền（ママ）ông Táo）」と記されている。

実態調査からみていくと、現在も土製支脚、土製焜炉、五徳は存在する。北部地域では簡易の作り付け竈を家庭で使用していた家（地域）があるという。中部地域ホイアンにはホイアン旧市街特有の竈があり保存されている。現在はその竈は使用されておらず、家族の食事にはガスコンロを使用している。レストランを併設する家では店での調理に小さな作り付け竈が使われている（表1④-⑩）。それぞれの道具については第3章で具体的に述べていく。

### 2）「ベトナムの竈」が置かれた空間

ここでは前述した「ベトナムの竈」がどのような空間に置かれていたのかを少し整理しておきたい。

#### （1）家の中に据えられた炉

ベトナムの家屋についての最も古い記述が、1293年陳孚<sup>(13)</sup>によって書かれた『安南即事詩』にある。松本信広の訳によると、「庶民の家は庇が低く、窓は地面について開き、犬小屋の口の如く、中はまっくらで、床にむしろを敷き、その上に坐し、炉には盛夏でも炭火をおこして湿気をはらっていた<sup>(14)</sup>」[松本 1969: 74]。この説明から、家屋は高床式ではなく地面に接して建てられ、その家のなかに炉が置かれていた。その炉は煮炊きだけでなく家を乾燥させるための役割も持っていたことがわかる。

キン族の家屋がいつ頃まで家の中に炉を置いていたのかはわからない。しかしいくつかの少数民族の家屋には今も家のなかに炉が作られている<sup>(15)</sup>。

#### （2）付属屋に置かれた炉

考古学調査から住居跡の土製支脚や土製焜炉の出土は確認できるが、住居における炉の配置、住居構造についての報告は未詳である。そのなかで、ナムディン省バココック村の考古学調査報告に、XBN3（Xóm Bén Ngự<sup>3</sup>）地点1B層で、副屋の可能性のある炉址や柱の基礎が確認されているとある[西村 2011: 237]。ここから、17-18世紀には、主屋とは別に付属屋が置かれていたと考えられる。

20世紀初頭、フランス植民地時代末期の北部地域の村落を人文地理的に研究した地理学者ピエール・グルーは、家屋の調査のなかで「母屋に対する台所の位置がさまざまなのは、トンキンでは特徴的なことだが、アンナンでは台所は常に家屋の左側に位置する（家屋に背を向けて）」と記している[グルー 2014（1936）: 287]。同時代、B.A.V.Hにフエの住居に関する報告があり、付属屋としての女性の空間は一般的に東側に建てられていると記されている[Craсте 1939: 35]。北部でも中部でも主屋とは別に台所としての付属屋が作られていたが、その配置には地域による違いがあった。現在でもフエ地域の伝統的家屋では主屋の左側に建てられた付属屋が女性の空間であり、そこに台所が置かれている。

#### （3）家の中の台所と付属屋

現在は屋内に台所が作られている家が多い。都市部では近年新たに多くの集合住宅が建てられ、また都市部の新しい一軒家は、狭い敷地いっぱいには2階建てや3階建ての家屋が建てられている。そのため必然的に台所は屋内に置かれる。しかし古くから現在の都市部に暮らしてきた人たちによると、現代的な家屋に建て替える前には独立して台所が作られていたという。ハノイの中心地から少し離れた歴史のある集落に代々暮らす家族のなかには、家屋のなかの一角に内井戸を残していたり、独立して作られていた台所の形跡を残していたりする家もある。

一方、地方では都市部に比べ家の敷地が広い。家の中に台所が作られても敷地内の付属屋に炉の空間を残している家もある。この付属屋は地域により主屋と繋がっている場合と離れた場所に建てられている場合がある。フエ地域の付属屋は前述したとおりである。付属屋に作られた炉にも違いがあり、一般的な地炉と立って使用することができる台付きの炉がある（写真1）。

ベトナムで家の中に台所が作られるのは、家の改築やガスコンロの使用が理由としてあげられる。ガスコンロが一般家庭で使用され始めるのは1990年から2000年代にかけてである。

以上、「ベトナムの竈」とその空間を時間軸で整理した。土製支脚が歴史時代以前から形態を多少変化させながらも継続して使われてきたことがわかる。また、土製支脚と併用して使用されてきた土製焜炉や五徳、その上に置く鍋、釜などの道具も現在まで使用が確認できる。

一方で空間は、屋内から付属屋そして、また屋内へと移っ



写真1 付属屋のなかの炉。(上)地炉(下)台付きの炉。筆者撮影

ている。聞き取りによれば主屋とは別に台所としての付属屋が建てられたのは、火事を防ぐためである。再び屋内へ台所が戻るの敷地や家屋の構造だけでなく、使用する道具や燃料の変化とも関係しているといえるだろう。

現在のキン族の家屋には日本における床上の炉としての「囲炉裏」はみられないが、ベトナムの付属屋は日本の釜屋に相当するといえるのかもしれない。

### 3. 形態と機能からみた「ベトナムの竈」

ここではそれぞれの道具について具体的にみていきたい。

#### 1) 土製支脚

##### (1) 名称

ハノイの歴史博物館に展示されているフングエン文化とドンソン文化の土製支脚は、ともに「チャン キエン (オン ダウザウ) chân kiềng (ông Đẩu rau)」と表記されている。日本語にすると「五徳の脚 (ダウザウ翁)」となる。これは土製支脚がダウザウ翁とも呼ばれることを示している。しかしこのダウザウの直訳は「野菜の頭」であり、その意味は未詳である。

ダウザウという言葉は、フランス人宣教師で現在のベトナム語であるローマ字表記を考案したアレクサンドル・ドゥ・ロードが1651年に著した辞典に、「火の上に鍋を置くための石」と記載されている<sup>(16)</sup>。これは漢越語ではないベトナム語固有の言葉である。竈を表す漢越語は、前述した「タオ (Táo)」である。

また土製支脚には、「ヌック (Núc)」という呼び方もある。フランス人研究者カディエールは、台所で使う三つの曲型のレンガを人格化しオンタオ (竈翁)、タオタン (竈神)、オンヌック (ヌック翁) と呼ぶと記している [Cadiere 2015 tập2: 60-61, 78, 1918: 57]。昔話の研究者であるグエン・ドン・チーによると、土製支脚を神体とした竈神の名称には地域差があり、北部ではダウザウ翁、中部ではヌック翁と呼ぶという [Nguyễn Đông Chi 1974: 219]。このヌックという言葉は1651年の辞典には記載がない。しかしキン族と同源といわれるムオン族に声調が異なる「ヌック (Núc)」という言葉があり、三つ石 (土製支脚) を意味する。ダウザウと合わせてこのヌックという言葉も古い時代の用語だと考えられる。

しかし現在、ダウザウもヌック翁もその言葉や意味を知る人は少ない。ヌックは現在、ベップ・ヌック (bếp núc) 「調理」という意味で用いられている。また北部地域以外ではダウザウという言葉はほとんど知られていない。中南部地域では土製支脚はオンタオと呼ばれており、北部地域でもオンタオと呼ぶ人は多い。

#### (2) 形態

ベトナム・キン族の間では3000-4000年前から最近に至るまで多少形を変えながら土製支脚が使用されてきた。近年の土製支脚については、現地調査から手で成形したものと型作りのものがあり、原料にも多少の違いがあることがわかった。

##### ①各家で手作りされてきた土製支脚

土製支脚は自分たちで作っていた。ベトナム北部タイビン省ヴートゥー県ヴーホイ社 (Xã Vũ Hội Huyện Vũ Thư Tỉnh Thái Bình) に住むインフォーマント<sup>(17)</sup> は1980~90年頃まで土製支脚を使用し、それは市場で購入することもあったが、毎年陰暦12月になると集落の人たちはそれぞれの家で土製支脚を作っていたという。その作り方は、粘土に粃殻と灰を混ぜて手で捏ねて成形し、そのあと乾燥させて完成となる。焼成はしない。それらは主に男性の仕事であった。12月に作る理由は竈神の信仰と関わっている。

土製支脚を手作りしていたのはタイビン省の村だけではない。ハノイ市やハノイ市郊外、中南部地域でも1980~90年頃まで各家で作っていたという話が聞かれる。残念ながらそれらの土製支脚は現在残されていないため、どのような形をしていたか詳細はわからない。

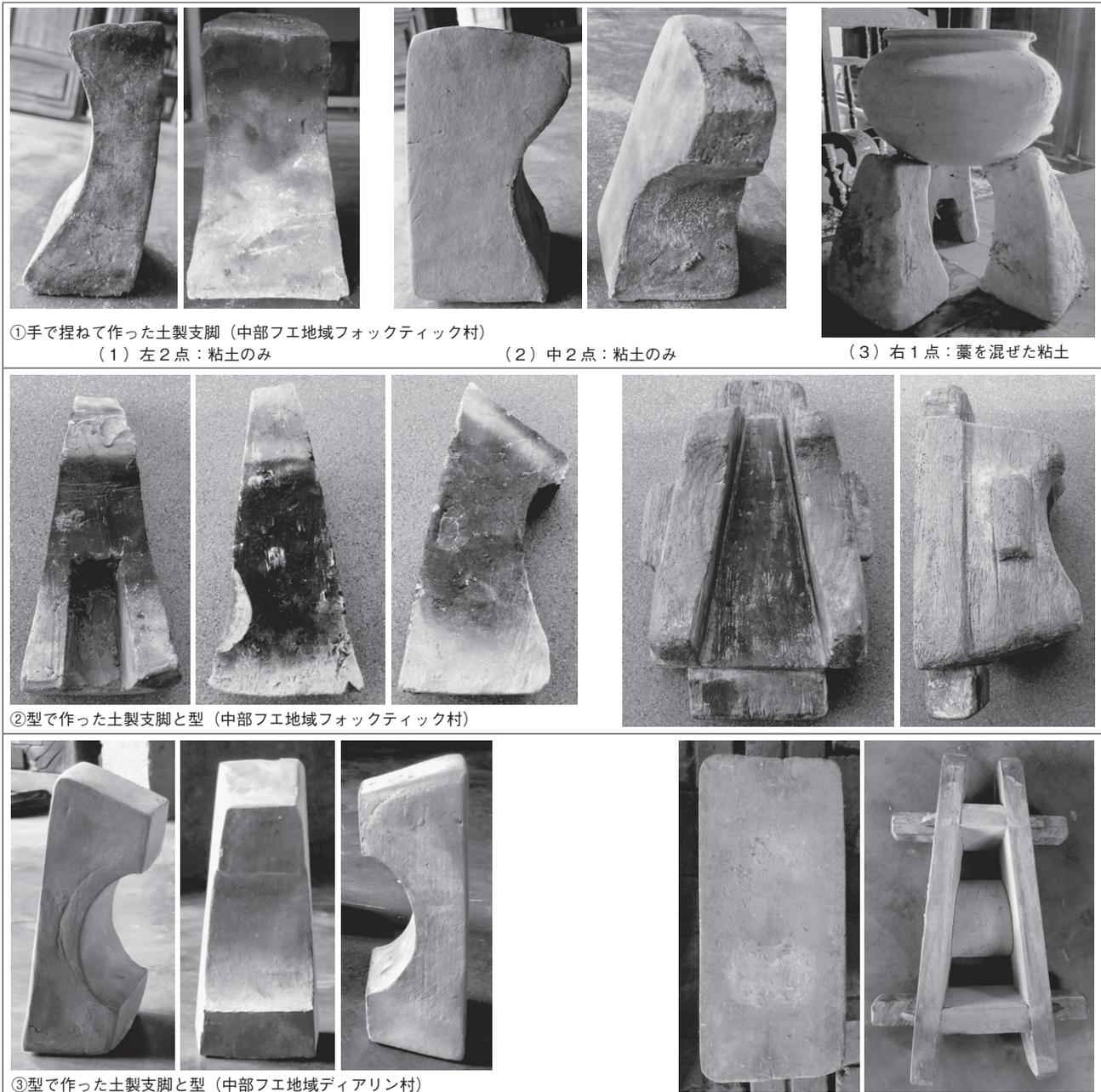
各家庭で手作りされた土製支脚の多くは、焼成せず乾燥させただけのものである。中部フエ地域には、乾燥させただけのものと焼成したものがあり、また手で成形したものと型

作りのものがある。竈神の神像を生産しているディアリン村 (Địa Linh, Xã Hương Vinh, Thị xã Hương Trà, Tỉnh Thừa Thiên Huế) では現在、小型の神像 (小さいオンタオの意味で「オンタオ ニョウ」と呼ばれる) と実用品としても使用できる土製支脚 (大きいオンタオという意味で「オンタオ ロン」と呼ばれる) を作っている。現在は土製支脚の生産自体が少なくなっているが、それらは全て型作りで生産している。しかし、以前は非常に少ないが注文があると手で成形した土製支脚を生産していた。型作りよりも大きなサイズで、原料は粘土に藁を混ぜていた。藁を混ぜるとひび割れしにくいという。また実際に煮炊きを使う土製支脚は焼成せずに乾燥させただけであった。

焼成した土製支脚を実際の調理に使用していたのはフォックティック村の人たちである。フエ市の中心地から北西へ約

30 km、クアンチ省 (Tỉnh Quảng Trị) に隣接するフォックティック村 (Xã Phong Hòa, Huyện Phong Điền, Tỉnh Thừa Thiên Huế) は、焼締陶器を中心とした窯業生産が17世紀以前から行われていた村である。Ω状に湾曲したオラウ川 (sông Ô Lâu) に囲まれた村に田んぼはない。築200~100年を経過する木造民家の主屋が残り、2008年に伝統的集落として国史跡に指定されている。村の人たちによると<sup>(18)</sup>、土製支脚を調理に使用していた頃はそれぞれの家で土を捏ねて手で成形し、そのあと村の共同の窯で一緒に焼いていた。しかし次第に土製支脚を使用する家が少なくなると、各家で作ることはなくなった。村長のホアン・タン・ミン (Hoàng Tấn Minh) 氏 (66歳 2020年当時) によると、村ではミン氏の父親を含めた4名が専業で型を用いた土製支脚と竈神の神像を作り商売としていたという。フォックティック村はフエ地域の人々が

表2 土製支脚 (筆者撮影)



竈神を祀るために用いる小型の神像を最初に作った村でもある。基本的に型作りの土製支脚は商品用であった。

現在、手で成形した土製支脚はレ・チョン・ダオ (Lê Trọng Đạo) 氏と村の陶器を自ら収集して博物館を作ったレ・チョン・ジエン (Lê Trọng Diên) 氏の家に残されている。ダオ氏の土製支脚は自分で作ったもので、粘土に藁が混ぜられているのがわかる (表2-①右)。ジエン氏が保存しているいくつかの土製支脚は藁が混ぜられたものと粘土だけのものがあるが、どれも商品として販売されていたもので、誰が作ったのかは分からないという (表2-①左・中)。

手で成形されたものは共通して背面と腹部が湾曲し、下のほうが大きく、安定するように作られている。しかし、形や大きさ、鍋・釜を乗せる部分の角度に違いがある。作る人や上に乗せる煮炊き道具によって違いがあるのであろう。また土製支脚の内側が削られているものがあるが、ジエン氏によると削って空洞のあるオンタオという意味で「オンタオ・モーまたはオンタオ・ゾン (ông Táo mô/rống)」と呼び、上には小さく軽い鍋などを載せるという。ジエン氏の博物館に展示された土製支脚には、銅製の鍋とその上に1958年と記された陶器のもち米用蒸し鍋と蓋が乗せられている。

## ②型作りの土製支脚

土製支脚は市場などでも売られていたというが、商品としての土製支脚がどのように作られていたのかは不明である。わかっているのは、フエ地域には土製支脚を作るための型が現存することである。現時点の調査で、フォックティック村に残された型が最も古い。

型はパラミツの木を用いて木工職人が作っていたという。村長のミン氏と博物館を作ったジエン氏が土製支脚の型を所有していたが、2020年時点でミン氏は型を処分してしまった。型作りの土製支脚は、手で成形したものよりも小型で、背面はわずかに湾曲し鍋を乗せる部分にはある程度の角度が付けられている。型作りの土製支脚は粘土のみで藁などは混ぜないという (表2-②)。

現在ディアリン村で作られている型による土製支脚も原料は粘土のみである。大きさはフォックティック村の型作りのものよりもスリムで小型である (表2-③)。

## (3) 機能

土製支脚を用いる目的は煮炊きである。日々の調理に用いられてきた土製支脚の機能は、支脚の上部に鍋・釜を載せて支え、支脚の間に作られた空間で火を焚くことにある。支脚は基本的に3本である。それは3点がもっとも安定する最小の数であるからだろう。ベトナムの少数民族や沖縄で用いられてきた三つ石、世界にも3点で支える事例はいくつもある<sup>(19)</sup>。この支脚の上に置かれるのは、球形の底部をした飯炊き用の素焼きの土鍋、フングエン期・ドンソン期に出土された釜形土器とほぼ同型の陶器や鍋・釜などもある。上にのせる道具の形や大きさに合わせて三つの土製支脚を置く位置

は自由に変えることができる。その支脚の間で用いられる燃料は一般的に薪である。

土製支脚は三つで一つの機能のほかに、以前は炉にもう一つ土製支脚が置かれ、火種を保つための道具としていた。18世紀に書かれた竈神の昔話に、灰で覆われた火種の上に土製支脚を置くことが記されている<sup>(20)</sup>。ベトナムの昔話の研究者グエン・ドン・チーはこの四つ目の土製支脚について、昔の農村にはマッチがまだなく、いつも午後になると、炉の近くに置かれた穀殻を一掴みくべなければならなかった。朝まで穀殻の火種を残すために、分銅の形に捏ねた土の塊を穀殻の上に置いて押さえていた。息を吹きかければ火は大きくなり、いつでも火が使えるようにしておいた、と説明している [Nguyễn Đông Chi 1974: 225]。分銅の形に捏ねた土の塊とは、土製支脚のことである。またムオン族の炉にも三つの石と別に、少し大きめの石が一つ置かれ、主(主人)の石 (nục chủ) と呼ばれている [Huỳnh và Nguyễn 2013: 36]。しかし、その機能については記されていない。

最後に、土製支脚と同じく鍋・釜をのせて火を焚き、調理に用いる道具、煉瓦について触れておきたい。煮炊きに使用する三つの土製支脚は、ベトナム語や他の言語で石や煉瓦と表現または訳されることがある。実際に煉瓦を用いて調理をすることもある。しかしベトナムの人たちにとって、土製支脚と煉瓦は同じではない。土製支脚は煮炊きのために作られたものである。彼らはそれをオンタオまたはダウザウ翁と呼んできた。しかし煉瓦をそう呼ぶことはない。

## 2) 土製焜炉

次に土製焜炉の機能と形態をみていこう。ここで述べる土製焜炉とは、土器として形作られる移動式竈(竈形土器)のなかでも底部を有するものである。この土製焜炉の起源は未詳だが、前述した17-18世紀のホイアンの住居跡から出土されたものと現在のものとに大きな違いはない。ベトナムの土製焜炉には日本の七輪と類似した縦長のものと、もう一つ横長の土製焜炉がある。ベトナム南部アンザン省で生産されるカーザンと呼ばれるものである。

### (1) 縦長の土製焜炉 形態と機能

土製焜炉は基本的には素焼きの円形で二段に分かれ、その間には丸く空気孔があげられて仕切られている。上段の仕切りの上に燃料を置き、焜炉上部には鍋・釜を支える用に三つの爪がついている。また側面に燃料を入れる孔が作られているものもある。下部には空気孔が切つてある。形は円形だが筒形に近いものや上部がわずかに広がったもの、上部の広がり大きいものなどがある。素焼きのままのもの、外側をブリキ(トタン板)で覆ってあるものがある。また三つの爪が立体的になり支脚のようになったものなどもある (表3-①②③)。

これらの土製焜炉の機能は、土製支脚と同様に鍋釜を載せて火を焚くことである。しかし、独立した三つの支脚からな

る土製支脚と違い、一体化し底部も作られたことで、燃料を燃やす場所もでき、一つの道具として完結する。そのため移動が便利になり、前述したサイゴン部隊が土製焜炉を持ち戦闘に参加することも可能であった。

土製焜炉で用いる燃料は基本的には炭である。しかし、大きな土製焜炉は付属屋などで五徳と一緒に用いられ、その場合は薪やおがくずが使用されることもある。

(2) アンザン省のカーザン (cà rặng) 形態と機能

この土製焜炉は横長で靴形をしている。オジェ編纂の版画にも1点描かれているが、これは南部地域で生産され、カーザンとよばれる土製焜炉である。

カーザンはメコンデルタ地域のアンザン省フータン県フートー社フーミーハー村 (ấp Phú Mỹ Hạ Xã Phú Thọ, Huyện Phú Tân, Tỉnh An Giang) で作られる。アンザン省はカンボジアと国境を接し、カーザン作りの村はメコン川流域に位置している。南部地域のオンライン新聞や雑誌などがカーザンの生産を取り上げている<sup>(21)</sup>。そこでの説明によると、原料はもともとクメール人が陶器作りをしていた地域の粘土を用い、完成したカーザンは舟にのせメコン川を流通経路とし、多くは

メコンデルタ地域のベトナム人やクメール人に使用される。このカーザン作りを専門としている村は、オンタオの村とも呼ばれるという。カーザンの起源は詳しくわからないが、おそらくクメール人たちの陶器作りと関係していると思われる。

カーザンは一般的な土製焜炉より大きく、形態の特徴は横長で靴形またはひょうたん形をし、その前方部に三つの爪がつけられ、鍋・釜を置くようになっている。後方部は薪をくべる場所であり、長い薪を何本か入れることができるように作られている (表3-⑤⑥⑦)。

カーザンの機能も鍋・釜を載せて火を焚くことであるが、横に長く大きく安定感があることから、大型の鍋などを載せることができる。このカーザンは屋内で用いられることはほとんどなく、屋外や焜炉が作られた付属屋に置かれる。何本もの長い薪をくべることができるため、強い火力で長時間の煮炊きが可能である。

3) 五徳 形態と機能

ベトナムにも円形の鉄輪に三脚をつけた日本の五徳とよく似た形態のものがある。輪の部分には内側に三つの爪がつけ

表3 土製焜炉 (表3-①~③、⑤~⑦/筆者撮影)

土製焜炉				
	①土製焜炉 外側はブリキ (トタン) で覆われている (中部フエ地域の民家)	②土製焜炉 形は大きめで筒型 (中部フエ地域の民家)	③土製焜炉 支脚のような立体的な3つの爪 (中部フエ地域の民家)	
中部ビンディン省土製焜炉				④出典: Bulteau, Roland 1927 Planche XXVII.- Poteries du Binh - Dinh: modèles de poteries non vénisiseés.
南部アンザン省カーザン				
	⑤カーザン1 (南部ホーチミン市郊外の民家)	⑥カーザン2 (南部ティエンザン省の民家) ⑦カーザン3 (南部ティエンザン省の民家)		

表4 鉄輪（五徳）／筆者撮影



①五徳（中部フエ地域の民家）

②鉄輪 1（中部フエ地域の民家）

③鉄輪 2（中部フエ地域の民家）

られている。ただし三脚部分に爪はなく、日本の五徳のように円形の鉄輪部分を下にして灰のなかに埋めて使うことはない。ベトナムの五徳はすべて円形の一部が欠けている（表4-①）。欠けた円形部分を正面にして、鍋や釜、薬缶、フライパンなどを乗せて用いる。五徳で使用する燃料は薪である。欠けている理由は、五徳にくべた長い薪を火力の調節のために上下左右に動かすのに都合がいいからであるという。五徳で火を焚く燃料はほとんど薪であり炭が使われることはない。

円形・三脚のいわゆる五徳だけでなく、長方形・四脚のものもある。長方形の半分を区切り、半分は格子状、半分は四隅から内側に爪をつけたもの、二本の鉄製の棒の間に数本縦に棒を繋げたものなど、形態はさまざまである（表4-②③）。どの鉄輪も上に調理道具を置いて使用し、日本の囲炉裏の脇に据えられた鉄輪のように魚や餅などの食料を直接置いて焼くということはない。またベトナムでは日本の火鉢のような道具のなかに五徳を置いて屋内で使用することもない。

#### 4. 「ベトナムの竈」と現在の人々の暮らし

第3章でみてきた道具が実際にどのように用いられているのか、ここではベトナム中部フエ地域のひとつの事例を取り上げる。フエ地域の伝統的な家屋は、間口三間または両側に一間ずつ房のある五間の主屋があり、その主屋からみて左側（フエの人々の共通認識としての東側）に女性の空間とされる付属屋が建てられ、そこに台所が置かれている。主屋とは屋根で繋がれている<sup>(22)</sup>。

以下はフエ地域で使用される伝統的な儀礼版画を生産しているシン村（Làng Sinh, Xã Mậu Tài, Huyện Phú Vang, Tỉnh Thừa Thiên Huế）のキー・ヒュウ・フォック（Kỳ Hữu Phước）氏の家の台所の様子である。

##### ・キー・ヒュウ・フォック家の台所の変遷

フエ地域の伝統的な手工芸である儀礼版画を生産するシン村で、専門的に儀礼版画を作っている家がある。筆者が初めて調査に訪れた2012年から2020年の間に台所が2度改装されている。1度は家全体が改築され、その後台所の空間だけがさらに改装された。



写真2 地炉に置かれた五徳と土製支脚。全体（上）、拡大（下）。筆者撮影

2012年、主屋からみて左に建てられた木造の付属屋は、土の土間で壁や仕切りには竹が用いられていた。その付属屋の一番奥に地炉が作られ、その隣には水甕が置かれていた。生活水は水道が入る2007年以前まで、村にひとつある大きな池のような井戸の水を汲んで利用していた。水道が通っても節約のために雨水も利用しているという。

地炉には五徳とその隣にセメントで固められた高さ30cmほどの台の上に半分壊れた土製支脚が置かれていた（写真2）。その壊れた土製支脚の上には三角形に作られた鉄の棒が置かれ、その上に鍋などを乗せるようになっていた。土製支脚は使えなくなるまで、基本的に何十年も使い続ける。最後の土製支脚は2016年まで使用していたという。炉の上部には竹の棚があり薪が積まれ、その横には笊、真っ黒になっ



写真3 地炉に置かれた五徳と土製焜炉。全体(上)、拡大(下)。筆者撮影



写真4 現在の台所。筆者撮影

た鍋などが置かれていた。そして付属屋のなかの小さな机の上にガスコンロがある。フォック氏の家には1997年からガスコンロが置かれている。

2014年、家が改装され、付属屋はセメントの建物になった。土間も壁や仕切りもセメントに変わり、炉の上部にあった竹の棚は角材で作られていた。しかし、まだ地炉はあった。そこに土製支脚はなくなり、五徳と土製焜炉が置かれていた(写真3)。水甕も付属屋からはなくなり、新たに洗濯機が置かれていた。

2020年、付属屋の内部が改装され、地炉はなくなっていた。壁には半分タイルが貼られ、土間は床タイルに変わり、地炉があった場所には洗濯機が置かれている。その横に現代

的なL字型キッチンが作られ、ガスコンロや炊飯器が置かれている(写真4)。そこに土製焜炉や五徳はなくなっていた。しかしよくみると洗濯機の前には大きな洗濯用のたらいがあり、また五徳も土製焜炉も屋外に置かれていた。祖先の命日儀礼など大量の料理を長時間かけて作る時には、今でもガスコンロではなく五徳と土製焜炉を使用しているという。それは節約のためである。

この台所の変遷のなかでも変わらないものがある。それは台所の壁に作られた竈神の祭壇である。

## 5. 「ベトナムの竈」と竈神の信仰

最後にベトナムの竈と竈神「オンタオ」の関わりについて述べたい。ベトナムでは現在でも家族を保護する重要な神として各家で竈神が祀られている。陰暦12月23日に天に上がり家族の報告をする竈神。中国の影響を受けてはいるが、その神体は中央に女神、その両側に男神が配置されるベトナム独自の女神一柱・男神二柱の三柱の神である。

わずか数十年前まで、人々が土製支脚を用いて調理をしていたとき、それは道具であり神であった。そのため上天する竈神の儀礼に合わせ、陰暦12月になると各家では土製支脚を作っていたのである。そして12月23日に1年間使用した土製支脚または土製焜炉は、木の下に置いて見送り儀礼をし、新しいものを炉に据えていた。神体の交換である。ここにベトナムにおける樹木信仰と土製の道具との関係を見ることが出来る。また、前述のタイビン省ヴァトゥー県ヴァーホイ社の人たちは、1年間使用した土製支脚を家の池に入れていた。そのことは20世紀中頃の文献資料にも記されている。

土製支脚の使用がなくなった現在、フエ地域では土製支脚を象った小型の神像が作られ、竈神の祭壇に祀られている(写真5)。そして今でもフエ地域では小型の神像を用いて竈神の見送り儀礼が行われている(写真6)。他の地域では神体の交換儀礼はなくなったが、陰暦12月23日の上天日は、三柱の竈神を祀るための供物や紙の冥器が用意され、儀礼が続けられている。



写真5 竈神の祭壇。筆者撮影



写真6 神像の見送り。筆者撮影

土製支脚だけでなく土製焜炉、五徳はその道具自体もオンタオと呼ばれてきた。現在のガスコンロはオンタオとは呼ばない。しかし台所の形態や道具が変わり、また祀り方に地域性がみられても、ベトナムでは共通して三柱の竈神が信仰され続けている。その基層には伝統的な調理道具、三つの土製支脚を用いてきた人々のくらしがある。

## 6. おわりに

ベトナムの「竈」のあり方について土製支脚などの用具を中心に、その形態と機能をみてきた。筆者が研究対象としてきた「ベトナムの竈」の大きな特徴は、後期新石器時代後期から続いてきた火所での土製支脚の使用である。伝統的な釜とともに現在まで用いられてきたことは、ベトナムが農業国であったこと、米の炊飯食文化と大きく関わる。今でも北ベトナムの新年の村まつりなどでは土製支脚と伝統的釜を用いた飯炊き競争が行われている。また、土製支脚と竈神の神像を生産してきたフエ地域のフォックティック村は、阮朝時代に王が食べるための米を焚く陶器の釜を生産しフエ王宮に献上してきた村である。

道具の形態からも特徴がみられた。そのひとつは円形の一部が欠けた五徳である。その理由は長い薪を動かしながら火力を調節するためであり、そこには炭を用いる日本の五徳との燃料による形態の差異だけでなく、強い火力で長時間の調理に使用する用途としての違いもあった。ふたつめは、カーザンと呼ばれるメコンデルタ地域の土製焜炉である。形態にはクメール人の陶器作りとの関わりがみられる一方で、そのカーザンはベトナムの竈神の名称「オンタオ」と呼ばれている。道具と信仰が融合された「モノ」としての土製焜炉カーザンは、メコンデルタ地域の地域性とあわせて考えていく必要があり、今後の調査の課題にしたい。

最後に、筆者のインフォーマントのひとりであるフエ地域フォックティック村のトゥ氏は、何十年ものあいだ薪を燃料とした五徳を用いて調理をしてきた。しかし、2年前の90歳にして初めてガスコンロの生活になった。ベトナムではこれからもガスコンロやIH調理器の使用が増えていくであろう。現時点では、台所の火所の形態や道具が変わっても土製支脚に原形をもつ三柱の台所の神は人々のあいだで信仰され続けている。また日常の調理に使用するガスコンロとは別に、祖先の命日儀礼や旧正月の料理の準備には五徳や土製焜炉がベトナム全土で使われている。

これらの道具もまた、これからのベトナムの社会や家族のあり方、人々の暮らしの変化とともにかわっていくのだろう。ベトナムでの生活道具の調査収集・研究はまだ十分に行われていない。人々の暮らしとともに今ある道具を少しでも多く収集して記録しておきたいと思う。

## 注

- (1) 『日本民具辞典』日本民具学会編 平成9年(1997)ぎょうせい
- (2) 『東アジア考古学辞典』2007東京堂出版 杉井健「竈」: 101-102
- (3) Alexandre De Rhodes 『ベトナム語ラテン語ポルトガル語辞典』1991(1651)

- (4) 川本邦衛編『詳解ベトナム語辞典』2011大修館書店
- (5) 先ドンソンとは、ドンソン文化に先立って継起した文化であり、ベトナムの考古学者によると、北部の先ドンソン文化は、フングエン、ドンダウ、ゴムの三文化に分かれる[大林、今村、宇野1984:128]。ドンソン文化とは、ベトナム北部を中心に分布する初期鉄器文化である。

- (6) フングエン文化(期)の捉え方は学者によって異なる。ここでは西村の位置づけに従ってフングエン期 4000 BP 頃から 3000BP 頃の後期新石器時代後半期とする [西村 2011: 16、52-53]。
- (7) 西村氏からご教示いただいた話である。
- (8) 釜形土器については「釜形土器の伝統」に解説がある [西村 2011: 86-87]。
- (9) ムオン族は、キン族と同源であり両者の共通祖先の一部は中国をモデルにした国家を形成しキン族となり、他は山間でタイ (Thái) 族に由来する組織原理に基づいた大小のムオンを形成し「ムオンの人々 (ムオン族)」となった民族である [宇野 2000: 673]。
- (10) Trong lớp 4 có một khu bếp. Trong phạm vi bếp có mấy cục đất hình trụ được bỏ cục như ông Táo và còn một cục sắt và một chiếc nồi gốm được tìm cùng tại chỗ với gốm sứ thế kỷ XVII. Như vậy tập quán sử dụng ông Táo bằng đất sét đã có mặt trong thế kỷ XVII rồi. (下線は筆者による。)
- (11) 1908-1909 年にかけて約 20 ヶ月間ベトナム北部地域の人々の生活を調査し、その日常や生活技術を版画によって記録をしていったものである。2009 年に再版されたオジェ編纂の版画は全 3 巻からなり、第 1 巻には「安南の人たちの職業についての総合的な考察」と版画解説、第 2 巻と第 3 巻に版画が総頁 700 頁、1 頁に 3 点～7 点ほど掲載されている。
- (12) オジェ編纂の版画に描かれた竈については、鍋田 [2018] で述べているため参照いただきたい。
- (13) 至元三十年 (1293 年) に元の世祖忽必烈 (フビライハン)

- の遣わした副使節 [松本 1969: 74]
- (14) 原文: 1293 年陳孚『安南即事詩』  
「有室皆穿竈無床不尚炉 屋無折架法自棟至簷直峻如傾棟  
至高簷僅四五尺又有低者故皆黑暗則就地開窓如狗竇然人用蒲席  
地坐而向明睡榻之側必有熾炉炭盛暑亦然以辟濕蒸之氣」
- (15) 少数民族の家屋はベトナム民族学博物館で展示・解説されている。またタイ族については樫永 [2009、2010] が詳しい。
- (16) Dầu rau のラテン語の説明: lapides quibus imponitur olla ad ignem [Alexandre de Rhodes 1991 (1651): 210]。
- (17) タイビン省ヴァトゥー県ヴァーホイ社では 2008-2015 年にかけて調査を行ってきた。
- (18) フォックティック村の調査は、2012-2020 年にかけて年に 1-2 回行ってきた。
- (19) 宮崎玲子 2009『世界の台所』にいくつかあげられている。
- (20) 鍋田 [2017] のなかで四つ目の土製支脚が登場する昔話の事例を紹介している。18 世紀の竈神の昔話については、Adriano di St. Thecla 2002 (1750): 148-149 に掲載されている。
- (21) アンザン新聞 <https://baoangiang.com.vn/hon-que-tu-nhung-chiec-ca-rang-a138355.html> 国境警備部ホームページ <https://www.bienphong.com.vn/ngay-cuoi-nam-o-ampxu-so-ca-rang-amp-post148523.html> ベトナム民 <https://danviet.vn/lang-nghe-ca-rang-ben-dong-song-tien-7777179207.htm> 最終閲覧 2020. 7. 23
- (22) フェエ地域の家屋の建築については、伊藤毅編 2018『フェエ』、奈良文化財研究所 2011『フォックティック村集落調査報告書』に詳しく記されている。

## 参考文献

- 阿部百里子 2002 「ファン・チュー・チン 69/5 地点の発掘調査」『ベトナム・ホイアン地域の考古学的研究』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol. 8: 59-112
- 伊藤毅編 2018『フェエ ベトナム都城と建築』中央公論美術出版
- 宇野公一郎 2000 「ムオン」『世界民族事典』弘文堂: 673
- 梅原末治 1944 「安南清化省東山出土の土製支脚」『人類学雑誌』第 59 巻第 3 号 日本人類学会: 75-78
- 大林太良・今村啓爾・宇野公一郎 1984 「東南アジアの先史文化」大林編『東南アジアの民族と歴史』民族の世界史 6 山川出版社: 79-150
- 樫永真佐夫 2009 『ベトナム黒タイの祖先祭祀一家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』風響社
- 樫永真佐夫 2010 「ベトナム、黒タイの「亀の甲」型の家」『ヒマラヤ学誌』No. 11、247-257
- 菊池誠一・菊川泉 1997 「ファンチューチン 129」『ホイアンの考古学調査』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol. 4: 133-144
- 小林行雄 1941 「土製支脚」『考古学雑誌』31 (5): 276-298
- 奈良文化財研究所 2011 『ベトナム社会主義共和国トゥアティエン・フェエ省フォックティック村集落調査報告書』
- 鍋田尚子 2014 「フェエ地域のオンタオをめぐる物質文化—オンタオ神像製作と儀礼—」『東南アジア考古学会』34 号 59-71
- 鍋田尚子 2016a 「版画に描かれたモチーフとオンタオ儀礼—シン村オンタオ版画を中心に—」『非文字資料年報』12 号: 177-197
- 鍋田尚子 2016b 「シン村の儀礼版画—伝統的版画製作と現在—」『民具マンスリー』49 (2) 5 月号: 1-17
- 鍋田尚子 2017 「ベトナムの竈神 昔話の事例紹介」『比較民俗学会報』第 38 巻 1 号 12-20
- 鍋田尚子 2018 「ベトナムの竈神と竈—アンリ・オジェ編纂の版画を中心に—」『Global Language & Culture』<http://www.gln.or.kr/article?num=20180007>
- 西村昌也 2011 『ベトナムの考古・古代学』同成社
- 松本信広 1969 『ベトナム民族小史』岩波新書
- ピエール・グルー 村野勉 (訳) 2014 (1936) 『トンキン・デルタの農民—人文地理学的研究—Pierre Gourou Les paysans du Delta Tonkinois』丸善ブラネット
- 宮崎玲子 2009 『オールカラー世界台所博物館』柏書房
- 【ベトナム語】  
Alexandre De Rhodes (biên dịch: Thanh Lăng, Hoàng Xuân Việt, Đỗ Quang Chính) 1991 (1651) *Từ điển Annam-Lusitan-Latinh* (Thường gọi từ điển Việt - Bồ - La), Nhà xuất bản Khoa học xã hội, Hà Nội  
Cadière, Leopold (Bản dịch: Đỗ Trinh Huệ) 2015 (1918) Văn

hóa tín ngưỡng và thực hành tôn giáo người Việt (Trọn bộ 3 tập) Nhà xuất bản Thuận Hóa

Huỳnh Ngọc Trảng và Nguyễn Đại Phúc 2013 Đặc khảo về tín ngưỡng thờ gia thần, Nhà xuất bản Văn hóa văn nghệ: 35-56

Nguyễn Đông Chi 1974 Kho tàng tuyển cổ tích Việt Nam Tập 1, Nhà xuất bản Khoa Học Xã Hội Hà Nội

Nishimura Masanari, Nishino Noriko, Trịnh Hoàng Hiệp, Hán Văn Khẩn "Mô hình cư trú của làng cổ ở Đồng bằng sông Hồng qua tư liệu khảo cổ học ở làng Bánh Cốc và xung quanh": 127-143.

【フランス語】

Craste, Léo 1939 "Etude Sur L'Habitation Annamite A Hué Et Dans Les Environs" B.A.V.H, (26), No1, Janvier-Mars 1939: 21-42

Bulteau, Roland 1927 "Notes Sur La Fabrication Des Poteries Dans La Province De Binh-Dinh" B.A.V.H, (14) No 1-2, Janvier-Juin:

149-184

B.A.V.H 1930 "La Chefferie du Génie de Hué à ses origines: lettres du général Jullien (Annam, Tonkin, 1884-1886)" B.A.V.H, (17) No 2, Avril-Juin

Oger, Henri 2009 (1909) *Technique du peuple Annamite, Mechanics and crafts of the Annamites, Kỹ thuật của người An Nam* I II III, Nhà xuất bản Thế giới

【英語】

Adriano di St. Thecla (Olga Dror translator and annotator) 2002 (1750) *Opusculum de Sectis Apud Sinense et Tunkinenses* (A Small Treatise on the Sects among the Chinese and Tonkinese): *A Study of Religion in China and North Vietnam in the Eighteenth Century*, Southeast Asia Program Publications Southeast Asia Program Cornell University Ithaca, New York